

学びの楽しさを、指導しましょう。

石井康雄（前船橋市立金杉台小学校 校長）

Q

1年生「なんじ なんぷん」では、時刻のよみ方をどのように指導したらよいでしょうか？

A

「なんじ なんじはん」と「なんじ なんぷん」の学習内容の違いをはっきりさせましょう。「なんじ なんじはん」の学習では、短い針で時刻をよむことが中心でした。長い針が12の位置にあれば、短い針が指している数字と同じ〇時となり、長い針が6の位置にあれば、短い針の位置より手前の数字の〇時半になりました。

本単元では、長い針が指している時刻をよみ取りますが、文字盤が60に分かれていることに気付かせて、15分や23分のような文字盤には書かれていない数字をよませなくてはなりません。そこで、挿絵のように場面を設定します。最初の発問は、「チケットを買ったのは、何時でしたか。」です。この答えは、子ども達からすぐに「9時」と出てきます。そして、その理由も説明できますが、次の発問が重要です。その発問は、「公園の入り口に着いたのは、何時何分ですか。」「どの時計を見てそう思いましたか。」です。入り口に入った時刻はわかっていて、短い針の位置は9時と10時の間にあり、チケットを買った時刻とほとんど変わっていません。ここまで確認して、長い針のよみ方を考えさせましょう。学習問題を立てるときには、「今、何時何分ですか。長い針のよみ方を説明しましょう。」になります。もっと具体的には、「今、9時何分ですか。長い針のよみ方を説明しましょう。」になります。そして、まとめ方として、最初に「短い針で、何時か？をよむ。」次に、「長い針で何分か？をよむ。」となります。

本単元の事前調査として、子ども達の中に、デジタル時計がどれくらい馴染んでいるか、どれくらいよめるかを調査しておきましょう。また、各家庭におけるアナログ時計の有無や、保護者が子ども達にアナログ時計に触れさせる機会をどれくらい与えているか等の調査も必要と思われます。

最近では保護者が入学時に算数道具を購入する際、セットではなく単品で購入するようになってきました。そのため、アナログ時計も単品で購入してもらえるような配慮をしていきましょう。なぜなら、時計の学習では、よむより針を合わせるほうが大変であったり、針の動く様子を見て、2年生で学習する時間の素地を体験したりといった、実際の操作が重要だからです。P146の5は、答えとそのよみ方を説明させます。6は、正解を選ばせるとともに、不正解な答えは、各自の時計でその時刻に合わせさせたり、どこが間違えやすいのかを聞いてみたりすれば、より確かな学力につながります。

Q

1年生「おなじ かずずつ」は、どのような指導をしたらよいでしょうか？

A

教科書にある問題は、3年生のわり算の問題です。そのため、3年生で学習するということで、省略したり、教科書に軽く触れるだけにしたりする先生方もみられます。しかし、学習指導要領解説を

見返してください。P147の問題は、確かにわり算の素材に見えますが、1年生のこの時期への指導は、数の構成と表し方に関する数学的な活動を通して、具体物をまとめて考えたり、等分したりして整理し、表すことになります。そもそも1年生の算数の学習は、算数学習の基礎的基本的な内容になっていますので、数についての感覚を豊かにし、乗法や除法を考える素地を養う必要があるのです。したがって、教科書に書かれていることを丁寧に指導しましょう。一方で、教科書以外の部分（わり算の指導）へ飛躍するような指導は控えましょう。

Q

1年生「たすのかな ひくのかな」は、どのような指導をしたらよいのでしょうか？

A

前単元とよく似た指導目的になります。数についての感覚を豊かにするために、1時間の学習の中で、加法か減法のいずれかの式になる演算決定を意図した問題を解かせるようになっていきます。指導の順は、加法と減法どちらを先にしてもかまいませんが、いずれも①に式がかいてあるので、初めから見せないようにして、子ども自身に考えさせましょう。ここで大切なことは、問題文を読んで、なぜたし算になるのか、ひき算になるのかという、立式の根拠を説明させることです。説明の際は、教科書にあるように、数図ブロックを使用させ、立式の理由と答えの出し方を発表させましょう。加法と減法を一通り学習した1年生のこの時期に、だいちゃんやひなたさんのような、式とその理由をしっかりと説明させることで、2年生へのなだらかな移行が可能になります。

Q

1年生「100までの かずの けいさん」では、どのような学びの楽しさを指導したらよいのでしょうか？

A

前単元の「大きい かず」との比較をしましょう。「大きい かず」では、数を数え、表すことが中心でしたが、この単元では、計算して答えを求めることが中心です。したがって、問題文を読ませ、聞かれていることを式に表現させます。そして、その式の見方を、数え棒で表現させ、計算のしかたを考えさせていきます。この学習のしかたを定着させることで、この単元の学びの楽しさを指導することができます。つまり、10のまとまりがいくつといくつでいくつになるとか、10のまとまりがいくつとばらぐいくつでいくつになる、という考え方です。このように、この単元は、指導の流れが明解なため、子ども達が主体的に学べるよう構成されています。子どもの側に立つと、問題文を読み、数え棒で考え（数え棒がなくても念頭操作で捉え）、式を立て、答えを求める一連の流れがつかめると思います。単元の導入時では、学習の流れが十分に理解できない子どもでも、単元後半には、学習の流れがわかり、より主体的な学習が出来るようになります。

なお、こういう単元では、終始一貫して、同じ教具（数え棒）を使用するようにしましょう。今日は数え棒、今日はお金の模型、今日は…といった教具の使用は、工夫した指導のように思えますが、子どもの混乱を引き起こしますので避けましょう。子ども達は、毎時間同じことの繰り返しでも十分楽しさを感じ取ることができますし、この指導のほうが学びを深める（確かな定着、心の残る学習）指導になると考えます。

